

## 謝辞

本書の執筆中に、私は多大な負債を負った。本書の作成の最初の段階から多数の組織と個人が際限なく私を支えてくれた。この数年間、私を助けるためにその時間と専門知識を割いてくれたすべての人に謝辞を述べるのは不可能だが、多くの方々についてここで特記しておかなければならない。

私の両親、張紹進と張盈盈の二人の博士は、南京大虐殺とその歴史における重要性を私に最初に語ってくれた。私は、彼らが時間を省みずに私の草稿を読み、重要な文献を私のために翻訳し、電話を通して長い議論の間に貴重な助言を与えてくれたことに深く感謝している。彼らは、賢明で、情熱的で、啓示的な、文筆家にとって理想的な夢のような両親である。本書を書いている間、彼らが私にとってどのようなものだったのか、私以外には真に理解できる人はいない。

私の編集者スーザン・ラビナーも、本書の歴史的重要性を認識し、私の執筆を勇気づけてくれた。数週間、数ヶ月を越える間、彼女は私の原稿を一行ごとに精査しただけでなく、彼女の素晴らしい理解力によってそれを大きく改善させた。編集長としての重い管理責任と、ベイシック・ブックス社を離れる直前に彼女が感じた個人的な圧迫感の中で、それをなし遂げてくれた。今日の出版の世界に、スーザン・ラビナーのように文学の才能、真実の核心に迫るノンフィクションの技能に関する深い知識、そして著者に対する真摯な配慮を兼ね備えた編集者は他にいない。彼女と長く仕事をともにできたことは、私の

喜びだけだけでなく、私の特権だった。

世界抗日戦争史実維護聯合会は私が南京大虐殺を研究するときの大きな支えであり、私に写真、論文、そして世界中の重要な関係者との連絡方法を提供した。同盟の中で、特に私にお力を貸してくれたのはイグナティアスおよびジョセフィン<sup>ドイツ</sup>、デイヴィッドおよびキャシー<sup>ツェン</sup>常、ギルバート<sup>チャン</sup>張、ユージン<sup>ウエイ</sup>魏、<sup>ツァオ</sup>J・J・曹、クオホウ<sup>ツェン</sup>常の方々である。

本書に血肉を与えてくれたのは、重要な文献の翻訳を支援してくれた方々である。四種類の異なる言語（英語、中国語、日本語をしてドイツ語）で書かれた一次資料を利用する書物を完成させるために、私は友人、同僚、そして面識のない方々の好意にまでも強く頼らなければならなかった。聡明なハイテク分野のエグゼクティヴ（企業の上層の経営者）で、五ヶ国語に堪能な私の友人バーバラ・メイジンは、貴重な時間を割いてドイツ語の外交報告書と日記を英訳してくれた。サンディエゴ在住のスギヤマ・サトコはボランティアで日本兵の戦時の日記を翻訳してくれただけでなく、南京の元日本軍兵士東史郎と私の文通の手紙を翻訳してくれた。

ハンブルクの歴史家チャールズ・バーディックとマーサ・ビージマンは、南京安全区の責任者だったジョン・ラーベの子孫を探し出すのを助けてくれた。私はジョン・ラーベの孫娘ウルスラ・ラインハルトに感謝の言葉を述べたい。彼女は、ラーベの人生の詳細な説明と、彼の報告書および日記のコピーを提供してくれた。また、朝日新聞社のジェフ・ハイネンにも、彼の好意によりラーベの文献の素晴らしい翻訳を提供してくれたことに、多大な感謝の言葉を述べたい。

東海岸への取材旅行を成功させてくれた友人たち。ニューヨークの湯美如<sup>ナンシー・タン</sup>は、彼女の素晴らしいド

キュメンタリー映画 *In the Name of the Emperor* (天皇の名において) に関連する資料を貸してくれた。シャオピン、邵子平と彼の家族はニューヨーク州ライ市で、親切に、部屋、食事、そして優しいもてなしを与えてくれ、ニュー・ハーヴェンのエル大学神学大学院の図書館に通うために彼らの自動車を貸してくれた。リーシェンイン、李昇言と彼の妻ウィニーC・李<sup>リ</sup> (美華論壇の前の発行人)、および歴史家のマリアン・スミスは、ワシントンDC滞在中の私に私心のない態度で交通手段、宿泊施設、そして精神的な援助を与えてくれた。国立公文書館では、ジョン・テイラーが南京大虐殺関係の信じられないほど多数の資料の検索方法を指導してくださり、地方の軍事および外交記録、日本の外国事務所の交信の傍受記録、OSS (戦略情報局) の記録と原稿、および極東国際軍事裁判の証拠を見つける手助けをしてくれた。

太平洋文化基金会は、私のアジアへの取材旅行の費用を負担してくれた。南京では、江蘇省社会科学院歴史研究所副所長孫宅巍と侵華日軍南京大屠殺遇難同胞記念館の副研究員段月萍が、私と共同で南京大虐殺に関する貴重な中国語文献を調査し、また市内各地の処刑場に案内してくれた。通訳の楊夏鳴と王衛星は、私と長時間作業し、文献の翻訳や取材したビデオテープのインタビューの筆写を手伝ってくれた。

中華民国では、現代歴史研究所の李恩涵が、私が中央研究所に滞在し大虐殺に関する調査を継続する手配をしてくれた。「中国時報」の記者キャロライン林は、親切に私にこの問題についてのさまざまな連絡先と資料を私に提供してくれた。古参兵林宝丁、林荣坤、程君清、王万勇そして劉永忠も彼らの資料に対する前例のない取材の機会を私に許してくれた。

南京大虐殺の何人かの生存者たちは、彼らの体験を私に話して、過去の恐怖を再現してくれた。ロサ

ンジェルスの牛先明<sup>ニウファウシェンミン</sup>、南京の陳徳貴<sup>チェンデグイ</sup>、ホウ・ツァンチン<sup>ホウツァンチン</sup> (Hou Zhanqing)、李秀英<sup>リーシューイ</sup>、リュウ・フォン  
 フォア (Liu Fonghua)、ニウウ・ヨンシング (Niu Yongxing)、潘開明<sup>パンカイミン</sup>、唐順山<sup>タンシュンサン</sup>、夏淑琴<sup>シャシューチン</sup>、中華民國の  
 シャン・ツァオフ (ジエフリー・シャン)、ツウー・チュアンユイイ (Zhu Chuanyu) の各方々である。

アメリカとヨーロッパの目撃者の生存者とその家族のほとんどが、彼らの時間と情報について無制限  
 に寛大で、私の電話インタビューに応じ、大虐殺の写真、文献、そして映画フィルムまでを提供してく  
 れた。ロバートおよびモートン・ベイツ、タニア・コンドン、フランク・テイルマン・ダーディン、マ  
 リオン・フィッチ・エクスター、ロバート・フィッチ、マージ・ガレット、ピーター・クレイガー、エ  
 ンマ・リオン、デイヴィッド・マギー、アンジーおよびハリエット・ミルズ、フレッド・リグズ、チャー  
 ルズ・ソーン、リランド・スチュワード、エディス・フィッチ・スワップ、マージョリー・ウイルソン、  
 およびロバート・ウイルソン・ジュニアの各方々である。

オクスフォード大学のラナ・ミッターおよびクリスチャン・ジェセンクリンゲンバーグ、コロンビア  
 大学のキャロル・グラックをとしてハーヴァード大学のウイリアム・カービーは時間を割いて出版前の本  
 書のレビューをしてくれ、貴重な学術的示唆により本書を充実させてくれた。

サンフランシスコでは、何人かの日本人およびアジア人が私に会い、南京大虐殺と日本人の第二次世  
 界大戦の責任の否定についての彼らの視点を議論した。一九九七年五月三十日のワークショップを組織  
 するときのハル・ムラカワが援助してくれたことと、シタニア・タムが事務所をミーティング用に使用  
 させてくれたことは嬉しいことだった。ワークショップの参加者たちには、大きな謝意を表したい。ア  
 キラ・ドウムラ、ケイコ・イトウ、ケンジ・オカ、チン・ジェン、スエコ・カワニシ、コニー・イー、

ヒロキ・ヤマジ、ノリコ・ヤマジ、ヤスヒロ・ヤマジおよびその他の方々である。

本書を完成させるためにさまざまな方向から私を補助してくれたのは、サイモン・アヴェネル、マリリン・ポウル、フランク・ボアリング、マーク・カジガオ、ジュリアス・チャン、バーバラ・カリトン、ジム・カルプ、エドワード・ドッツ、マーク・エイクホルト、デイヴィッド・ファーンズワース、ロバート・フリードリ、リチャード・フモサ、クリス・ゴフ、ポール・ゴロブ、ギルバート・ヘア、ヒロ・イノクチ、ロン・キン、ペトラス・リウ、デイヴィッド・マックワーター、カレン・パーカー、アクセル・シュナイダー、ジョン・スウイーニー、シゲヒサ・テラオ、マージョリー・トラヴァース、アオ・ウオン、ゲイル・ウインストン、ウーティエンクエイ呉天威、イシジェイムズ伊、および史咏シヨウなどの方々である。

最後に、私は私の夫ブレットン・リー・ダグラス博士に感謝の言葉を捧げなければならない。彼は中国での日本の残虐行為の恐ろしい話を次から次へと聞かされることを、不平も言わずに我慢してくれた。彼の愛、智慧そして勇気が私に本書を完成させる力を与えてくれた。